

翻刻 木脇啓四郎「明治八年上海日記」

丹羽謙治

木脇啓四郎（一八一七—一八九九）の人となりおよびその業績についてはすでに、原口泉ほか編『薩摩藩文化官僚の幕末・明治 木脇啓四郎『萬留』—翻刻と注釈—』^{（注1）}の解題で述べ、さらに本誌においては嘉永五年（一八五二）の北関東・新潟・東北の旅日記を翻刻し、その背景について考察を試みたことがある。今回は、啓四郎が陶器の販路開拓のため、明治八年（一八七五）五月に上海へ渡航した際の紀行（日記）を紹介することにした。

本資料は鹿児島大学附属図書館木脇家文書の中にあるものであり、名称については、包紙に啓四郎の孫の木脇祐之の手で「祖父啓四郎祐業／上海行ノ日誌」とあるが、資料内には題が見られないため、登録名として丹羽が「明治八年上海日記」と付けた（以下、本稿では『上海日記』と略称する）。

まず、本資料の現状について述べる。『上海日記』は半紙の青色九行罫紙（縦二三・二センチ、横三十一・五糎）に毛筆で認められており、現状は表紙もなく、罫紙三十五枚が半分に分かれた形で束としてまとめられているに過ぎない。また、半折された罫紙は折り目の反対側の端がいわゆる馬食い

の状態で欠損している。つまり、紙を広げると両端の上部がない状態になり、本文の解読を困難にしている。筆跡をみると啓四郎の自筆本であることは間違いない（図版1参照）。

次に内容であるが、以下に詳述するように、啓四郎が明治八年五月二十五日（旧四月二十日）苗代川（現鹿児島県日置市美山）を出発、長崎経由で上海に赴き、上海で陶器の販路を開拓するために活動した六月十四日までの記録である。ただし、最後の六月十四日は日付のみであることから、清書が完成しないままであることを示しているようである。というのは、木脇家文書の中には啓四郎の日記の断簡が書簡の裏打ちなどとして使われており、その中に『上海日記』の元となる資料が含まれているからである（図版2）。

図版2は、木脇家文書の資料のうち、本家の木脇次郎（祐治）^{（注2）}が「亥新二月十四日」に啓四郎とその息子藤次郎宛に出した書簡の裏に貼られているもので、「五月廿七日曇天旧四月廿二日」「五月廿八日曇天旧四月廿三日」など『上海日記』と対応する日付が見られるほか、本文も一致するところが多い。裁断されて欠損が多いのは残念であるが、「五月廿四日半

晴旧四月十九日」とあることから、日ごろ認められていた日記が存在することがわかり、現存する『上海日記』は、その中から上海旅行の部分を取り出して内容を改めながら清書した（途上の）ものと推測される。旅に携行した小型の冊子の日記を基に、紀行が立ち上げられてくる過程を見ることができるといふ点では大変意義のある資料と考えるが、原日記が断片しか残っていないのは返す返すも惜しい。

啓四郎の上海行

啓四郎は明治元年十一月に地方官として樋脇・山崎・鶴田・佐志・黒木・宮之城、入来・蘭牟田を受け持ち、翌二年に指宿・頰娃・山川の地頭副役を務めている（三年地頭になる）。



図1

明治三年に甑島地頭に振り替えられ、翌四年八月からは博覧会事務局に出仕する。病氣療養のため辞任後、帰郷し入来・樋脇他北薩の副郡長、明治五年産物取調のため日向国各地を巡歴して『日隅薩巡回採摘品彙編圖』（東京国立博物館蔵）を完成、その

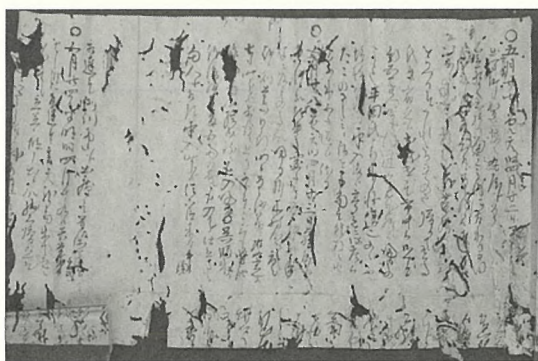


図2

後十三等出仕博覧会取調御用を拝命する。明治六年島津久光とともに上京した啓四郎の長男弥太郎祐信の日記により、啓四郎および弟の藤次郎と五月に東京で会っていること、啓四郎と藤次郎を撮影した写真が残っており、その箱書きに「明治六年戊二月五日」とあり、弥太郎を交えた三人の写真が「五月十七日」とあることから、この間東京にいたことは明らかである。弥太郎の前掲の日記から少なくとも「七月二日」までは東京に滞在していたことがわかる。一方、「折田年秀日記」明治七年十二月二十九日条に折田を神戸の湊川神社に訪問した記事があることから、その後帰郷したものと思われる。

苗代川陶器会社への就職は明治六年ごろと推測されるが、具体的な日付については不明である。

鹿児島県の「田之浦陶器会社」とともに島津家から移管された「苗代川陶器会社」について深港恭子は次のようにまとめる

ている。^(注9)

苗代川陶器会社は、「御届」からは生産会社の支社として明治6年に設立されたと考えられるが、先に述べたとおり、明治5年にはウィーン万博出品に向けた動きが認められる。……(中略)……

苗代川陶器会社は社長を迫田助右衛門、副社長を有馬九左衛門が務め、職員に木脇啓四郎がいたことがわかっている。木脇は明治6年に大山県令の勧めで勤務し、苗代川に結めた。明治8年5月頃には、実際に木脇は上海へ出張している。しかし、諸方に営業をかけたものの大きな損失をだした。これらの戦略の失敗により会社の経営は追い込まれていったようで、明治9年には借財をかかえこみ、明治10年10月には倒産している。

^(注10) 啓四郎は晩年に自らの業績や見聞したことをまとめた『萬留』で、上海行のことを次のように語っている。

其後旧知事公の會社、苗代川、大山氏^註より差越候様、承知、相勤候処、段々前田圓吉殿の見當相違いたし、神戸、横濱等、并ニ支那上海へも渡海いたし候へ共、思ふ通無之、終ニ病氣も差起り候故、退社いたしたり。

右の引用にもある苗代川陶器会社について、同じく『萬留』では、

拙者、苗代川詰ニハ有馬九左衛門殿兩人也。

とある。

有馬九左衛門は「税所龍右衛門系図」^(注11)によると、啓四郎の画の師税所龍右衛門篤之の長弟である。同系図には次のよう

にある。

御小姓與甚右衛門二男

弓六

初篤實、有馬弓六、仁左衛門、九左衛門、長左工門、

純長

一文政十三年寅七月朔日於御書院中紙進上二而、初而之御目見、奏者末川將監

一天保五年午九月朔日御小姓與有馬與左衛門純香養子成、但馬殿令取次川田求馬

この「系図」によると税所篤之の死後(嘉永六年十一月九日)、九左衛門の二男である栄次郎が税所家を継ぎ、龍右衛門篤清となる。なお、『上海日記』には有馬彦十郎の名前がしばしば登場する。啓四郎の留守宅と共に彦十郎宛に手紙を認めているが、これは啓四郎の次女常の夫であり、九左衛門とは別人である。

登場する旧薩摩藩関係者

『上海日記』には長崎や上海に滞在し、啓四郎が面会したり助言を受けたりする旧薩摩藩関係者が多く登場する。大山格之助(令君)、指宿貞父(指宿氏)、町田實一(町田君・町田氏)、笠野熊吉(笠野氏)、平田氏、川口氏、横山氏、松元氏、横山氏などである。

大山格之助は当時の鹿児島県令で、啓四郎を陶器会社に誘った人物である。中央の方針に逆らい、西南戦争では薩軍を支援したため、戦後長崎で処刑されたのは周知の事実であ

る。この他、重要と思われる人物について触れておく。

町田實^(註1)一は、天保十三年（一八四二）十一月十四日、鹿児島城下加治屋町の有島家に生まれ、後に上之園町の町田家の養子に入る。養父は『上海日記』にも名が出る「町田助十郎」である。明治四年（一八七一）東京府少属、翌五年海軍権大録、同六年海軍中主計となり、軍艦春日に乘組み、中国各港を巡航、七年海軍大主計に昇進した。啓四郎が渡海した当時は、中国上海に滞在。この後、町田は九年に海軍主計局計算課長、十五年八月に外務省に移り、中国出張を命ぜられ、明治十六年から領事代理として香港駐在、十八年十一月には領事となり漢口に駐在、九江兼轄を命じられ明治二十三年（一八九〇）十一月病気のため帰国、翌年退官し、鹿児島農水産業、公共事業や社会教育に携わり、鹿児島財界、社交界を主導する。大正五年（一九一六）一月三十一日没。享年七十五。大正五年二月二日朝刊の町田の死亡広告では「親族」として「川上親長／木脇藤次郎」が連名で出ている。『上海日記』では啓四郎が實一の義父助十郎^(註2)（？——一八八九）に手紙を送っていることから、助十郎と交流があることを思わせる。一方、町田家の別荘が木脇家のある唐湊にあり、後に同じ共研舎（学舎）に関わっているという地縁はあるものの、両家が縁戚の関係であることは未考。しかしながら、木脇藤次郎の昭和六年（一九三一）の日記を紐解くと、實一の長女梅子やその妹熊野ヨシ子との連絡が頻繁に行われていることから両家の関係が深いものであることは想像に難くない。

次に、指宿貞父である。『上海日記』では、妻とみや末の舎

弟小倉兵一とともに長崎に滞在していることが知られる（五月三十一日条、六月三日条）が、その役職などは不明である。『上海日記』とは直接関係しないが、指宿は、明治九年一月十九日、小林寛とともに山口県萩の前原一誠の許を訪れた、西郷隆盛、桐野利秋の内意を告げに来た密偵として知られる（『前原一誠日記』、徳富蘇峰『近世日本国民史』に引用）。征韓論後の流動化した政治情勢を背景として、海外の情報が集まる長崎で他県への動向や外国の動静を伺い情報収集に当たっていたことが推測される。

なお、指宿が啓四郎に銭別で贈ったと推測される短冊が木脇家（分家）文書中に残っている。「送別 唐衣たち別れなばしき嶋の大和錦をきてかえら南^(註3)」とある。同じ短冊帖に「信 勤むへき道は数多も有物をなりて堅きハ信なりけり貞父^(註4)」とあり、裏に「指宿後納右衛門獄中□□うたなり□□□」とあって、通称が知られる。因みに指宿納右衛門なる藩士の住居は木脇家ある唐湊にあった（塩満郁夫・友野春久編『鹿児島城下絵図散歩』から、同一人物あるいはその家の者なら啓四郎との関係では地縁も大きな要素となっていたことになる。

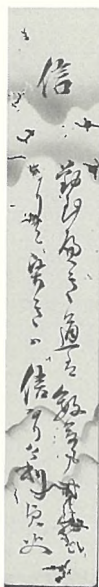


図4

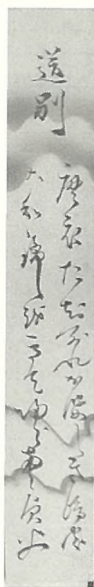


図3

笠野熊吉は啓四郎が長崎に到着した当日（五月二十六日）

最初に訪問した人物であり、啓四郎は「陶器一条」につき、笠野に相談を行っている。笠野は自身大蔵省の用向きで上海、香港その他諸所に行くことから、「商法はいつれ初発より大掛二せすして賣捌之目途確定之上盛大ニ製造方被成候方」がよいとし、「此節ハホンコンへも差越候ニ付、此地の形勢探索いたし帰朝之上報知可致」と協力を約束、併せて渡航の手續きの手配を行い、啓四郎の長崎での旅宿（丸屋喜右衛門、「蒸気船宿」とある）も紹介している。なお、啓四郎の上海滞在中に笠野も上海に来ているようで、『上海日記』六月十日条にその名前が見える。笠野は開拓使関係の中国貿易を担当している薩摩出身の商人であり、この後函館を中心として対中国向け昆布輸出を行う広業商会の初代社長となる。ただし、熊吉は明治十二年（一八七九）六月十九日に死亡、遺言により五代友厚に代理を依頼している。^(生没)

桃山氏とは苗代川陶器会社の桃山一郎か。桃山（樺山）は明治五年六月、明治天皇が田之浦陶器会社を行幸した時の同社の役員とされる。

この他、重要な人物は啓四郎と同じ時期に長崎に到着したとみられる「平田氏」であるが詳細は不明である。また、薩摩藩に關係の深い人物として南部弥八郎がいるが、後述する。

長崎、上海にはそれぞれ旧薩摩藩の關係者が多数存在していた。後に長崎とは一衣帯水の距離と言われた上海であるが、誰でも海外で出られるわけではなかった当時、比較的ス

ムーズに旅ができたのは右のような旧藩時代から培ってきた薩摩の人脈やコネクションがあったからに他ならない。

旅の行程

ここで改めて啓四郎の旅の行程を整理しておこう。

明治八年五月二十五日 苗代川発、江口（乗船）

五月二十六日 長崎着（船で泊まる）

五月二十七日 散髪後、丸屋喜右衛門へ投宿。

五月二十八日 上野屋、木村屋へ赴くがいずれも当主は留守。

五月三十日 指宿氏と市内の骨董店へ。平佐

に出入りした者のところで金泥につき話あり。

五月三十一日 渡航手續きを丸屋に頼む。

六月一日 上野屋で輸出手續きの指南を受ける。手續きに会所へ行く。

六月二日 外務省へ出頭。

六月三日 午後二時、出船。

六月五日 上海着。町田氏の出迎え。崎陽号へ投宿。

六月六日 上野屋と陶器の値段の相談。市内見物。

六月八日 城内見物。

六月九日 荷物（商品）が届く。品物を取り調べる。

六月十日

商品陳列、販売を始める。品川忠道領事を訪問。

六月十一日

日本への便船があるため手紙を諸方へ認める。

六月十二日

衣笠豪谷と買い物。田圃を見る。

六月十三日

ガラス製品を買いに出る。

六月十四日

(本文なし)

六月二十一日

丸屋を通じて切手を返納。この日まで長崎に戻る。

(六月三十日

故郷に帰る。苗代川に立ち寄る。^(まど)

長崎の啓四郎

啓四郎は明治八年五月二十六日から六月三日まで九日間長崎に滞在した。長崎は初めてではなかったと考えられる。少なくとも維新後上京して帰国する際には長崎を経由したと推測されるからである。現に啓四郎の日記の断簡に長崎のことが出てくる。

先述のように、笠野や指宿、平田など長崎には旧薩摩藩士が多数滞在をしていたから、助言や案内を乞うことも容易であった。今回の旅の目的は陶器の販路拡大、輸出のためであったから、長崎の貿易商との連絡は欠かせないものであった。五月二十八日、啓四郎は上野屋、木村屋へ出向くが主人はいずれも留守、白茶家二つに煙草を土産として贈って店を後

にしている。『上海日記』の記載から上野屋は上野弥平治、木村屋は木村惣平で、長崎の当時の貿易商である。六月一日、啓四郎が上野屋に赴くと、主人は「懇切二色々輸出一条」について教えを授けた。出国の手続き等については蒸気船宿の丸屋の手代源蔵の付き添いを受けて役所に出向いている。

長崎滞在中では、五月三十日の記事が印象深い。啓四郎は指宿貞父に連れられて「骨董家の知人」のところへ案内される。店内には数百品の骨董品が並んでおり、これを見て啓四郎は「東京にてもなし」「漢土の産のミ、故に品物に風韻且餘情有り」と記している。主人は留守であったが、その母と妻の案内で店内一杯の骨董品の数々を堪能した。翌々日も二人で店を訪れるが、この時も主人は留守であった。この店は「池平」とあるが屋号か主人の名が不明。五月三十日骨董店「池平」を辞去した後、以前平佐に頼みに来ていた者を訪れる。平佐は現在の鹿児島県薩摩川内市平佐で、近世以来平佐焼で知られる。平佐焼を扱う長崎の商人を訪れたということであろう。そこで、鹿児島で使用する金泥と長崎や伊万里で使用する金泥の比較論が展開されている。前者は正金で、後者は混ぜ物が入っているということで、混ぜ物を使えば陶器の品位が大きく落ちるという。『上海日記』で啓四郎は伊万里を「今井」と表記している。Imariの「r」が脱落した形に「今井」の文字を充てたものである。鹿児島方言では「蟻(あ)」が「ㇿ」となるなどの例がよくある。

六月二日朝、啓四郎はネバタという飛脚船が長崎に入ったことを丸屋の妻から聞き、外務省で印章をもらう。翌日午後

二時、一路上海に向けて出港する。

上海の啓四郎

啓四郎は六月五日、上海に到着する。ネバタでは、言語が通じないまま一人で四日間過ごしたことになる。甲板に立つて眺めた風景は日記本文に見えるが、初めて外国へ渡航する時の心得ともいべき覚書きによって船中の様子が明らかになる。一例を挙げれば次のような記述(二十四丁裏)である。

……飯ハ西洋料理也。給ひ方ニ不取なれならハ部屋^五取寄候がよし。此節も食方ニこまり候故、取寄食す。是ハ一番安氣にてよし。酒ても菓子ても給仕^五いへハ何も自由なし。……

上海の港の賑わいを啓四郎は驚きを以て眺めているが、「船の入口^五板橋を平地の如くなして人は勿論荷物も運方也」と大型の船が棧橋に直接接岸する姿を描写する。現代から見るとありふれた光景だが、日本では沖合に停泊した大型船に舳で移動するのが一般だったから啓四郎にとっては特筆すべきことだったろう。

上陸すると、田代屋の若い者が迎えに出ているので、通弁を通じて知らせると、若い者は手持ちの荷物をもつて田代屋へ案内してくれた。田代屋では町田實一(前述)が待っていた。啓四郎は感極まっては物も言えず「あまり珍士敷事落涙」に及んでいる。この田代屋は明治元年(一八六八)八月、上海で陶器販売を考えた長崎田代屋慶右衛門の命で田代屋源平が上海で開店した店で、「日本人雜貨店元祖^(五)」とされる。西洋

人へ陶器を販売するとともに、在留の日本人(特に女性)に化粧品など小間物を販売したという。啓四郎の旅宿は長崎県の保護を受けて上野弥七郎らが設立した崎陽号で、これは明治五年(一八七二)一月開店、「小間物並に諸品委託売買」し、「旅宿を兼業」していた。^(五)啓四郎は長崎の上野弥平治から届物を頼まれていることから、長崎の上野屋とは当然経営上の繋がりがあろう。

啓四郎の上海の旅宿(崎陽号)で同宿した人物に倉敷出身の文人、衣笠豪谷がいる。啓四郎は六月五日の日記に、「……案内之支那人を付、崎陽号へ帰る。亭主至極亭寧也。同宿大勢也。同座は小田縣倉子城の人衣笠豪谷と云画人二而、支那^五遊歴^三来りし人の由也。是もいまた若人なれと、至而深切之仁二而仕合也」と紹介している。

豪谷は嘉永三年(一八五〇)七月生。父、大橋弥一。母衣笠氏。明治七年(二十五歳)三月、長崎から上海に渡航、蘇州を初め、浙江省紹興、杭州など名勝地を遊歴し、翌八年上海に戻る。産業取調を行っていた。年齢は親子ほど離れているが、画を描く事や博物、殖産興業に係ることに従事する点で啓四郎と共通点を多く見出すことができる。

豪谷は中国(清国)に渡航した際の漢文日記『乗植日記』^(五)を残しているが、啓四郎の『上海日記』に豪谷が登場する六月七日、八日の両日記を並べてみよう(傍線は引用者)。

【上海日記】

六月七日小雨旧五月三日、肌持至而よし。雨終日不止。在宿也、亭主の男子誕生日の由にてあん餅出る。豪谷士

白ぬめの風呂敷に桃と靈茸を染筆也。此仁ハ文人画ハ勿論漢学ニ長せし人なれハ、此節□□□開拓使北京始諸所色々探索の□□□從の筈相究る。此人ハ画を以當地ニ遊び粗支那語も相分り、至而風雅の仁なり。実ニ藝ハ身を助るとか、此節の行相濟候上ハ、何か官員か其下仕に相違有之間敷、尤人物至而平穩なり。士氣も相立居候仁故、一通の官員ニハ相違有まし。四時比より南部弥八郎殿筆話せんとて明りのよき坐敷御入来、故に我か卒を出して其業を助く。竹田氏、水川氏其外段々客来有。亭主西清古鑑残欠本見せられ候故寫方也。南部氏も被引取、豪谷士も三松号へ行れ候故、ひとり日本酒少々のミ七時過ふせる。

【乗植日記】

七日、禮拜一即木曜日、雨、本日午後、與勸業寮七等出仕武田昌次、議定余夜北京之事、作荅大原里賢書、夜抵三松號、與島村久閑話、

【上海日記】

六月八日雨天旧五月四日、昼飯後より城内見物ニ出る。何小路、彼の小路といふ通行筋、其狭き事やうく一間位左右の軒落合通行筋雨ふりニハくらき程也。……(中略)：段々見物してくれ前帰る。内ハ亭主の嫡子の物舞ニ而大悦び也、拙者も被呼出張る。佳肴珍味山の如し。日本の客人式拾人許有、其内十八九の女子四人、是ハ諸所出来

居候由。尤亭主の妻下女迄込れハ三拾人近き集二てにきくし。一首亭主祝ふ、「榮行ちよのためしに引そめしあやめは君かみとり子の為、夜十時過部屋帰る。昼町田氏分書付来りたりとて出す。町田氏居□□□□来れとの事也。其返答ハ弥七郎より相濟□□□□□□其夜暖大きく故豪谷士と列立夜店見ニ出る。履毛拂取入帰る。拾二時頃伏る。

【乗植日記】

八日、清曆端午、微雨、午後旗昌洋行、夜以寓中孩兒周歲之禮、開宴、夜散歩、

啓四郎と豪谷のそれぞれの日記に対応する部分(傍線部)が確認できるが、啓四郎は豪谷の人となりや動きを細かに觀察した描写から、この若者に好感と敬意を持って接していた様子が伝わってくる。一方で、豪谷の日記は記載が簡潔で、啓四郎のことを特に記すこともない。豪谷が主に日記に記載するのは志を同じくして大陸に渡ってきた役人たちである。その中の一人に幕末期に薩摩藩のために探索を行った南部弥八郎がいる。『乗植日記』では、六月九日、十日条にそれぞれ「夜又同南部陳満川成種散步」「此夜勸業寮中属南部陳及満川成種等、坐快也堅輪船往湖北泗川等處」とあり、南部弥八郎との親交が見える。

南部弥八郎(陳)の伝記については、川畑利久「薩摩藩探索方南部弥八郎伝 附東郷宗元」が詳しい。これによって概

略を記しておく。

南部は幕末期、薩摩藩のために情報探索を行った人物として知られ、その探索書は『鹿児島県史料 玉里島津家史料補遺 南部弥八郎報告書1』『同2』として刊行されている。維新後南部は明治五年二月十七日に博覧会事務局十等出仕となつている（前述のように啓四郎も同所に勤務しているが接点があつたかどうかは未考）。翌年三月、博覧会事務局を辞し、八月三十一日に東京府十一等出仕、翌七年七月二十一日に内務省十一等出仕、八年勸業寮中属として五月八日清国へ派遣の命を受け、同月二十九日に上海着、品川忠道等と協議の上、満川成種と湖北省の漢口、四川省地方へ養蚕・製糸の取り調べのために向かつた。

南部は明治十一年六月、清国公使館付書記一等見習として北京に滞在、その後病氣となり明治十四年二月二十一日帰国、同年七月六日、六十三歳にて死去。

もう一人、『上海日記』で登場する重要な人物として、領事の品川忠道がいる。品川の伝および業績については松本郁美「初代上海領事品川忠道に関する一考察」に詳しい。これによれば、品川は長崎のオランダ通詞の家に、天保十一年（一八四〇）に生まれる。明治政府に訳官として仕え、明治三年（一八七〇）に通商権大佑として上海に派遣され、翌四年には日清修好条規締結の一行に加わっている。品川は上海領事官の設置に奔走、五年二月十日、代理領事となり、上海に領事館が設置された。領事の任務は多岐にわたるが、そのひとつに日清の貿易促進があつた。

啓四郎は、後に紛糾しないように上野屋と確固とした契約を結び、値段を決め、品川領事の検査を受けるべしとの町田實一の助言を受け、六月十日、品川領事に面会している。領事は陶器の「製造方并作法立」について啓四郎に質問、息子がドイツに居るので西洋への流通も探ってみたいと陶器流通への理解と期待を示した。

陶器流通の問題

さて、啓四郎の本来の目的である上海での陶器販売の探索という点について触れておきたい。最終的には目論見は失敗に終わることになるが、何が問題であつたのか『上海日記』から探ることにしたい。

町田實一は国益に叶う陶器輸出が発展かつ永續するよう規則を立てる（契約を取り結ぶ）ことを助言しているが、六月六日、啓四郎は弥七郎と販売方針について相談し、二ヶ月ほど様子を見ながら陶器の製造、販売を行っていくこと、値段は最初から「六掛之七掛の」と決めることをせず、売れ行きを考慮してから値段を定め、見通りが立つてから盛大に販売を行うことを助言されている。その後帳面を見せてほしいと言われ、見せたところ、弥七郎は値段の高さに驚愕、肥前の陶器の値段と比較してから定めるように言っている。陶器会社の目論見とは大きく値段の面で差があつたことがわかる。その後、六月十一日、啓四郎は上野弥七郎の手代と値段の吟味をしたところ、「四掛位」と決まる。

一方、六月九日に運上所（税関）から荷物が届くが、荷を

取り調べてみると粗末な荷造りによって多くの陶器が疵物になり、一箱は微塵になつていた。「込」(緩衝材)の不足によって花生け同士がぶつかって破壊に及んだものと啓四郎は推測している。

鹿児島で製造した陶器を長崎経由で上海に輸出、現地で販売するという事業の困難さが改めて透けて見える。肥前の有田焼などと比較しても、輸送のコスト、破損のリスクなど課題が多かったことが想像されるのである。

啓四郎は六月十三日に町田に対して、現状報告と指図を求める書簡を認める。それは、『上海日記』の巻末に収録されている。注目されるのは啓四郎の「御國産を繁殖して盛大の輸出を量るの目的立兼」ねるといふ現実的な判断であり、上海に持ってきた商品を上野屋に売り捌かせて様子を見たうえで、①上野屋一手に任せるのか、②田代屋にも任せるのか、あるいは③田之浦と苗代川の製品をそれぞれ二つの業者に分けて販売させる、④笠野熊吉の開通号に加わりこれにも販売させるのかなどを帰国の上決定するべきかなどを問い合せている。こうした点を見ると、上海での陶器の販売についてはまさに手さぐり状態だったことが理解されるのである。

おわりに

『上海日記』は商売のことのみならず、見聞録の要素も多々ある。啓四郎が買い物に出た際、言語不通のなか筆談を行いながら現地の人々から注目を浴びたことや路地の様子、租界(寄留地)の「塵取馬車」の仕掛けのこと、上海周辺の漢族の

幕制のことなど興味深い記述が見られる。こうした明治初期の上海の風俗の描写は本資料の魅力のひとつと言つてよいであらう。

『上海日記』の日記本文の後には、旅の要点や心得を記した覚書がまとめられている。息子の藤次郎などに読ませるためであらうか、啓四郎晩年の著作物に見られる子孫への配慮を思い出させる記述である。

〈注〉

〔注1〕 岩田書院、二〇〇七年

〔注2〕「嘉永五年の木脇啓四郎の巡国旅行とその背景」『国語国文薩摩路』四十八号、二〇〇四年三月、「翻刻 木脇啓四郎『巡国日記』—嘉永五年の関東・東北・越後の旅日記—」『国語国文薩摩路』五十号、二〇〇六年三月

〔注3〕 現在鹿児島大学附属図書館には木脇家文書として分家(啓四郎の系統)と本家の木脇家の資料が収蔵されている。分家資料寄贈の後、本家の資料の一部が寄贈されたことによる。以前の貴重書展で公開展示された資料等で単に「木脇家文書」とあるのは全て分家の資料である。『上海日記』は「木脇家(分家)文書」蔵と呼ぶべきであらう。

〔注4〕 一八三〇—一九〇七。通称は次郎右衛門とも。啓四郎の妻カネの弟で、木脇本家(嫡家)の当主。文久元年(一八六一)十一月より大口地頭代、明治二年(一八六九)民事奉行、同五年庄内・上三保・財部・高原・山之口の里正、その後鹿児島県二等勸業掛として出仕。啓四郎とともに鹿児島歌壇で活躍する。

(注5) ちなみに五月廿七日の本文を翻刻しておく(句読点を補う。／は改行を示す)。

「○五月廿七日曇天旧四月廿二日早朝船を／出万町二而髪を摘ミ丸屋^江差^江□□□□／笠野へ出張る。留主。其内伊官来る。平田／氏□□□知有。差越候而逢□□／以来之事を相頼む。義董の三幅對／を見る。すくれたるもの也。帰りに有馬／氏并宿元^江書状遣す。市中二而児玉／新五右衛門殿^江行逢、□□飛脚を歸りとのこと也。平田氏より来候様使也。少々不塩梅故断る。夜入過亭主を呼考二而／たこのさしミニ酒を手當す。他行之由／二而不來。五ッ過分伏る。」

(注6) 鹿児島大学附属図書館木脇家(分家)文書蔵。弥太郎の在東京日記は明治六年一月一日～八月十一日の分が残っている。ちなみに明治七年二月に弥太郎は死亡。明治八年三月に藤次郎祐充の長男願が出されている(木脇家(分家)文書)。

(注7) 鹿児島大学附属図書館木脇家(分家)文書。

(注8) 『折田年秀日記 第一』群書類従完成会、一九九七年。

(注9) 深港恭子「田之浦陶器会社・苗代川陶器会社について―藩審から民営会社への転換―」『明治維新150周年記念 黎明館企画特別展 華麗なる薩摩焼―万国博覧会の時代のきらめき―』、同発行委員会、二〇一九年。

(注10) (注1) 前掲書。

(注11) 東京大学史料編纂所蔵、島津家本さ1-9-44

(注12) 町田實一の履歴については『明治百年史叢書 東亜先覚志士紀伝(下)』(原著は、昭和十一年。黒龍会編、原書房、一九七四年)、二宮彦助他編『大典記念鹿児島縣紳士録附淑女録』(鹿児島縣紳士録

編纂事務所、一九一六年)を参照。町田敬二『ある軍人の紙碑剣とペン』芙蓉書房、一九七八年)では實一の孫である著者が實一やその妻について触れている。

(注13) 当時の鹿児島には鹿児島朝日新聞と鹿児島新聞の二紙が競合していた。しかし両紙は共通の記事が載ることも多く、町田の死亡広告も共通の内容である。因みに友人として掲載されているのは「河野主一郎／吉田清一／玉利喜造／山本徳次郎／愛甲兼達／折田兼至／有馬純俊」といった鹿児島の各界の名士たちである。

(注14) 鹿児島市唐湊^との城ヶ平墓地の墓碑による。「同(明治) 助十郎 同廿二年十月同(死)」とある。

(注15) 拙稿「資料紹介『昭和六年木脇藤次郎日記』(一)・「同(二)」・「同(三)」」鹿児島大学法文学部紀要 人文学科論集 八十四・八十五・八十六号、二〇一七年・二〇一八年・二〇一九年。

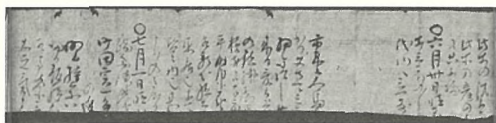
(注16) 本稿では『近世日本国民史 西南の役(一)』(講談社学術文庫、一九八〇年)を参照した。

(注17) 高城書房、二〇〇四年。

(注18) 八木孝昌『新・五代友厚伝』(PHP研究所、二〇二〇年)。日本経営史研究所編『五代友厚伝記資料』第三卷(東洋経済新報社、一九七二年)史料一七三・一七四に笠野が六月十九日十二時に死去したことが見える。

(注19) 深港恭子「近代薩摩焼関係者・事項解説」(注9) 前掲書所収。

(注20) 木脇啓四郎の次の日記断簡による。



「木脇祐治宛木脇啓四郎書簡」
の裏打ちに使用された断簡
鹿児島大学附属図書館
木脇家（分家）文書（書簡68）

笠豪谷」。

〔注26〕「鹿児島歴史研究」創刊号、鹿児島歴史研究会、一九九六年四月
〔注27〕「史窓」五十八号、京都女子大学史学研究室、二〇〇一年二月

翻刻

〔凡例〕

一、鹿児島大学附属図書館木脇家（分家）文書蔵『木脇啓四郎 明治八年上海日記』（仮題、文書番号27）を、翻刻したものである。

一、変体仮名は通行の仮名に直したが、「江」「二」「ハ」「ミ」はもとのままとした。また、合字「ふ」も元のままとする。

一、漢字は可能な限り原本の形を残すように努めた。

一、句読点を私に付した。

一、濁点は原本のままとし、新たに加えていない。

一、見せ消ちは「〔見せ消ち〕○○」の形で見せ消ちの部分を示した。割注は「〔割注〕として（ ）でくくってこれを示すが、本文とポイントとは区別していない。

一、頭注は「〔頭注〕として（ ）にくくり、当該箇所に近い本文内に挿入した。

一、改行は示さず追い込みとし、丁移りを、「（○オ）または」（○ウ）の形で示した。

一、本文の欠損部分は字数をはかって□で示した。

一、右傍の（ ）は編者の注記である。

一、本文の日付はポールド（太字）とした。

〔注21〕横山宏章『上海の日本人街・虹口 もう一つの長崎』（彩流社、二〇一七年）、遠山景直『上海』（遠山景直発行、一九〇七年）

〔注22〕〔注21〕に同じ。なお、同書によると崎陽号は明治十九年（一八八六）に閉店した由。

〔注23〕〔注21〕に同じ。遠山景直『上海』遠山景直発行、一九〇七年。

〔注24〕豪谷の伝記については小松春翠『豪谷畫莽遺墨集』再版（一九一六年）所収「衣笠豪谷先生傳」、八田真理子「衣笠豪谷の生涯と画集」（『衣笠豪谷』岡山県立美術館、二〇一九年）を参照。

〔注25〕東洋文庫蔵本を閲覧。岡山県立美術館に原本が所蔵されており、東洋文庫蔵本（六冊）は浄書本である（前掲、岡山県立美術館『衣

一、本文の右傍の*は、後に注があることを示す。注は翻刻の後にまとめた。



○五月廿五日晴旧四月廿日 旧知事公御遠馬の御序二両陶器山御巡覽、役宅へ被為御昼飯被召上暫く御滞座、七ツ過御機嫌能御発馬被遊候二付、御跡祝いたし、暮前より手廻道具半助馬^ニ負せ、迎も来候故同道二而江口へ出る。藤兵衛方今来れといふ、急故直二乗船す。塩時あしく、四ツ過出船す。一点の雲なく順風無申斗串木野端島^(羽島)の沖にて伏る。 「(一オ)

○五月廿六日晴旧四月廿一日阿久根の沖にて曙光開く。押通しに追風にて長崎^江四時比着船す。直二上陸、笠野氏^江差越候処、幸内故陶器一条及談合候処、細々承、話いたし候得共、此節ハ大藏省之御用向ニ而上海諸所へ差越筈御座候二付、専ら探索出来申候二付、拙者陶器案内之事、殊ニ此一事のミニ御出被成候故、上海^江差越候而専要探索いたす可然、令君、□□□山君、□本君^江細事可申上候二付心す。渡。

【頭書】(船頭とも機嫌よくもてなし候故、御旅錢舟玉様へ祭候様言付処別而嬉ひ猶更順風□□□) 「(一ウ)

□氏□□□様承候二付、其筋ニ決定す。笠野云、商法はいつれ初発より大掛ニせすして賣捌之目途確定之上盛大ニ製造方被成候方可宜、此節ハホンコンへも差越候二付、此地の形勢探索いたし帰朝之上報知可致との事、就而ハとても明日之便船よりハ御切手等之手数も有之候二付、来る六月三日便船今渡海之方可然、其内上海着之上ハ町田君^井上野屋等^江談し、都

合可致置、尤御切手等之儀は丸屋^ニ喜右衛門と云蒸氣船宿有之、此者^江私ハ細ニ相頼可申候間、旅宿も此方へ可致申候二付、上海一条細事相頼、且、町田助十郎殿、有馬彦十郎殿書状も相頼、丸屋方江差越候て引合候処、旁都合よし、當夜はいまた荷物も船江積込置候二付、夜船へ一泊す。

○五月廿七日曇旧四月廿二日早天(見せ消ち)船^{上陸}、万歳町二而髪摘ミ丸屋へ差越、手廻具相頼置□□笠野へ出張る。留主。其内伊官来る。平。

【頭書】(荷物式拾箱、丸屋の□□□□□) 「(二ウ)

□氏□□□御着相成候由、殊ニ平田氏よりも報知有之、差越候ハ當港之都合同、且以来事件相頼む。義董の三幅對入手之由二而一見す。別而上出来也、○歸ると有馬氏^井宿元状相認、郵便分送る。○夕方平田氏より来候様申来候得とも、草臥居候二付斷り、尤亭主を呼候含にて酒肴取寄相待候得とも外出長く、終に自約二てのミ、五ツ過より伏る。

○五月廿八日曇旧五月廿三日上野屋へ差越^ニ候処、頼中の事ニ付外出仕、今日ハ遅方ニ可相成旨いづれ夜半二及へくとの旨承候二付、明日来る旨申置、木村屋^江立寄る。是も同段也。両方共に白茶家貳ツツ、煙草を添へ土産ニ遣す。七ツ過より歩行二出、船中醬油、酢、煎出入用の小^ハふらす^ニ三ツ取入れ帰ると、呉服屋来る。越後細壱反五円式歩二取入仕立方も當人^江相頼む。夕方より伊官来る。さしミ、牛肉等取入ふるまふ。四ツすき□り候故伏る。 「(三ウ)

○五月廿九日曇旧四月廿四日早朝舟頭来る。今日出帆すると事故、船中一日の旅篋料三貫五百文□相究置候得共、式拾

錢相拂。船頭大二嬉帰る。藤兵衛へ傳言を託す。○角^{カク}唐々三ツ、蓋物^{フタモノ}沓^{カサ}ツわらつと二して右^{ミナミ}相頼、役宅迄遣呉候様藤兵衛頼遣す。○横山氏、杵元氏^{キリノ}、宿元^{ヤスノ}氏細書、且又、栳山氏、川口氏^{カワグチ}當所之形勢細書、伊官^{イカン}相頼、有馬氏、御嫡家様へも同断差遣す。昼過より諸所^{モトモト}（四ウ）徘徊して夜入過より伏る。○五月三十日曇旧四月廿五日朝飯後平田氏^{ヘイデン}差越、南京焼の蓋物沓^{カサ}進す。帰りに伊官旅宿服部氏^{フクベ}へ差越候処、伊官留主故、東北西惣様古金屋をさかし、帰り二指宿氏^{ササキ}行逢ひ、久々の疎遠を述ふ。明日ハ是非来レとの事也。別れて錠鑰二ツ取る。帰りて直に指宿氏^{ササキ}差越候処、段々客人有り。故に白茶家^{チヤカ}煙草^{エンソウ}□内^{ウチ}の下女^{シモメ}相渡、直二帰る。おとミとの二ハ（四ウ）□居見物之由也。帰り居ると貞父殿やかて見舞あり。暫く被相頼、骨董家之知人有之候故見物二行へしと被誘差越候処、當人留主也。そのか、との、妻女との至而亭寧の人物にて色々嘸も有之、必ず見るへしとの事故、奥の座敷迄も見物いたし候処、数年来集て商法するとみえ、実ニおひたしき品なり。是程数百品一所二みるハ東京にてもなし。尤尤金銀家之由也。爰ニも白焼の茶家始て（五ウ）見る^{ミル}と面働二相成候故進入す。か、とのなど大嬉ひ也。骨董品^{ボウドウ}すへて漢土の産のミ、故に品物二風韻且餘情有リ。それより平佐へ以前頼二相成来居候者^{キタ}出張、金泥一条探索いたし候処、今井^{イマヰ}當所ニ而用候金泥ハ交物有之故、色合縣の品とハ大に違ひ、すてに鹿兒島平野屋手代持參之錦手品二付今井の者も參り合、金泥一条二相成候処、□縣の金泥ハ正金也、今井の金は交物（五ウ）□□□也、其証拠は是く^{コト}と相頼候処閉口いたし候。

依而以来御縣の金泥ニて地の金泥御用ひなされましくと當所の金泥など御用ひ相成候へハ陶器の位落申候故、返すくも御止被成候方可然旨懇切二相頼候。一禮云て指宿氏にわかれ帰る。五ツ過ふせる。蚊少々出候故、蚊牒^{モシ}を引く。

○五月三十一日晴旧四月廿六日朝○御切手之事、○當港輸出税之事、拙者乗込并運賃^{ウツ}（六ウ）錢等之事、○荷物積入^{モノヅメ}并運賃錢之事、右當所ニ而之都合御頼申上候、○上海着舟之上開通号^{ツウゴウ}井田代屋、上野屋^{ウノヤ}通じ方之事、○税金運上所^{ウチノ}拂方之事、右飛脚^{トビヤク}、通弁官御頼置被下度事、○鹿兒島縣下第一大區小一區二百三拾壹番地居住木脇啓四郎、五十九歳○上野屋^{ウノヤ}陶器六箱願置申候二付、荷作出来次第貴公御藏内^{ウチノ}先日之荷物一所二□□□□下度、しかし此儀ハ今日今一往^{イッパツ}（六ウ）□野屋□□置可申旨、其後取寄方之都合御頼申上候事、

五月卅一日

木脇啓四郎

丸屋様

右之通書て亭主惣平^{ヘイ}依頼いたし置候事、

○越後細かたひら出来、仕立物屋持參致し候故、五拾錢相拂。四貫文故式拾錢向ふ返にて此内ハ四錢地半洗手間二下女^{シメ}相拂。○昼過上野屋^{ウノヤ}二度行候得とも留主也。伊官^{イカン}へ出張候処、昨日出船二相^{ニハ}（七ウ）成候由。帰ると指宿氏より又来れと云て使来る。直に相立、上野屋^{ウノヤ}立寄。荷作最中也。手拭包送。指宿氏へ行、夫婦共に大嬉ニて段々地走あり。おとミとの、末の舍弟小倉兵一殿、外二兩人御国の人つとり来り絵書字書など有り。久々ぶり氣^キほうし二相成、夕過帰る。

○六月一日曇旧四月廿七日上野屋へ出張候処、至極懇切二

色々輸出一條ニ付傳受也。斤目方之処別而□□相成□仕合之至也。○歸りに麻裏草履老足^(七ウ)□□^(モカ)貴式百文也。九時過分手代の源藏同伴ニ而町會所立出る。判一條ニ付源藏歸る。□待居る内二十二時二なる。午後ハ願事不相決との事故引とる。道ニ而逢ふ。拙者よし明日申受都合ニ今日いたし置との事故別て歸る。七ツ過よりまた貞父殿入來、同道ニ而又池平之所^正行。今日も留主故又一見してくれ過歸る。尤も指宿氏へ中途よりわかる。

○六月二日朝曇旧四月廿八日朝ネバタといふ飛^(八オ)脚舟着之由内の妻より聞。又惣平公明三日午後二時出帆之由申出る。十時比より源藏同道ニ而出張。外務省^正出頭す。十一時比御印章相渡る。其官員分別而難有御示誘也。御印章大切ニかくこいたし置、帰国之節直様返上納可致被仰聞候。十二時比より小雨ふり出す。夕方帽子^并パン^{取入}に出、直ニ歸る。夜入過雨中ニ小倉兵一殿^并おとみとのいとまこひに入來、暫く被相嘶候故菓子とも出す。□□^正られ候故、酒給ひ故郷恋しく伏る。

【頭書】(明日より発艦之由。有馬□^正并二内□^正郵便□^正出す。□□^正年へ□□^正)^(八ウ)

○六月三日曇旧四月廿九日早朝より出船之仕舞也。平田氏^并指宿氏へ暇乞^三行。貞父殿自製也とて卦紙老冊、ボンス一瓶^并和哥一首送らる。

○廿七日今六月三日迄之諸拂相済し、下駄式足^正雨晴用也、酒宅舛余、だし小瓶沓ツ、せんへい少々船中用^正取入る。○赤毛せん包沓ツ、丸屋^正相頼置。○書状式通、ケツトウ^{(見せ}

消ち】毛せん)包沓ツ、上野弥平治殿^正崎陽号へ届物被相頼候事。○百式拾円、丸屋^正頼兩替いたし、諸入費相拂、尤一々究有^(九オ)三拾圓八拾沓錢八厘也。残金西洋のとるにして相究。○丸屋^正開通号への送状沓通相究。○乗船之節通弁之者^正五拾錢位舌代被下候方都合可宜と手代の者申候故、其通通弁之者^正呉候処別而都合よし。○午後二時出船、五島の沖に至ると、西大洋海故浪高く、殊雨風別而強く横風^正相成候処、船かたふく。夜中同断也。

○六月四日晴旧四月三十日、四方雲と浪との洋中□□□□る風景こゝろよし。乗輿^正を支那人^(九ウ)□□□□□一言もいふ事なし。只通弁之者飯時斗かたる斗也。昼時分より風止ミ白浪立す。しかしねりは前之濱等の大風後の如く強し。漸々^正靜なる。夜入過分少々風立追手^正なりて早舟増益々早し。

○六月五日晴旧五月朔日、すてに東方明なるとする時起上り、看板^正出で四方を望めは、上海に向て左之方へ火あかる。せんく夜も明る。近くなると小島ミゆる。支那人ニとへと不通。又右之方^正帆掛舟^(十オ)一艘ミゆる。暫くして左之方へ釣舟ミゆる。又雲となミと^(見せ消ち)の^(一)になる。此手前より海中濁る。夜明ると支那人とも衣服着替方とりくも。故郷に歸る心皆二而うれしき有様也。最川口ニ入候故か、海上手洗の水の如く更に座中^正安座する如し。水の濁ること凡六拾里のよし。漸々近づくに付て濁り甚し。向より白帆の小船本船を差て来る。是支那船ニ而水先を乗する為の□□□□之由也。此舟は跡ニ漂たけしき^(十ウ)□□□□□相

待との事。此邊上海の地方糸を引たるか先左の方へミゆる。又やかて右へもミゆる。又三ツ帆も四ツ帆も追々ミゆる。此邊ハ日数の里数にて三里餘も川幅有之とのよし。上海港より凡斗の処^マ番船大小數艘大炮をすへ、小船も色々飾付有之哉ニミゆる。至而龜なもの也。それ分港ニ近くなるほと帆前船、蒸氣船數しれす。且又支那船の多き事ハ何千とも知れず。渡戸口ハすへて橋の如く作り出し、それに氣船の横を直付^{十一オ}にして、尤船の入口^口板橋を平地の如くなしして人は勿論荷物も運方也。着すると日本人、支那人迎ひなと來候由ニ而、それに荷物を為持^ナとして大さわざ也。田代屋の若者直^ニ迎^ニ來候故、通弁より此者^ナ話^ナし候処、案内ニ而手廻も為持、直^ニ田代屋^江入ると、町田氏御出迎、座敷^江通る。そのうれしさ暫くハ物もいはす。あまり珍敷事故及落涙候。やかて宿元の直左右かた^ナく嘶出^口に兄弟へ逢たる心地す。やかて開^{十一ウ}□□□□□へ行及示談候処、細事上野や^江談置候付、此方^江御宿ハ勿論万端示談可致旨又々町田氏同道ニ而弥七郎^江致相談候処、至極よき受合也。それ分町田氏^江差越、段々地走ニ逢。夜四ツ時分帰る。小舟分上り、田代屋を尋れと、言語ハ不通、あちこちする内、幸ニハネバタの通弁通りを掛り同道ニ而田代や^江行。手廻、最尤車を頼具、案内之支那人を付、崎陽号へ帰る。亭主至極亭寧也。同宿大勢也。同座は小田^{十二オ}縣倉子城の人衣笠豪谷と云画人ニ而、支那^江遊歴^ニ來りし人の由也。是もいまた若人なれと、至而深切之仁ニ而仕合也。上野屋も來りて見本を見て感心す。いつれいまた荷物も運上^江有之、明日ハ休暇故、明後七日ニハ引渡相成可

申候間、現品拝見いたし店頭^江飾付等いたし、新聞を出し候ハ、買手も参り可申、いつれ十日位は滞在いたし形勢も御覽被成方可宜、其内ニハ色□□□□付可申、其上御婦朝可然と別而^{十二ウ}□□□□□也。弥七郎も引込候故、豪谷主と兩人ニなり、暫く相はなし伏る。四更の比より雨ふり出す。○六月六日曇旧五月二日、朝弥七郎二明日ハ究候都合可相成色々談合いたし候処、何れの品も賣れぬと申事ハ有之間敷相考候へとも、とても速くニハ運兼候へ共、日数を経て異人も此所^江薩摩陶器賣出しになるといふを知り候へハ、多人数の集り処故、決而賣立可申、壹二ヶ月も過候へハ凡之形勢も^{十三オ}相分可申、左候而近々屯相成居御品御遣に成、捌^{サケ}候上、此節あまた圖御取相成候品々御製造御始相成方可宜、段々と各国^江廣り候上ハ自ら向より注文も可有之、其上盛大^ニ御手か付候方可然、笠野も云候故、一先此節之品上野へ賣捌かせ被成候へハ凡の直段も相分可申、先日も申上候通、六掛之七掛のと算法建をいたし候而も買人なれハいかによき品も用立す候故、初發當人も□□□□もたせ追々賣捌相成候へハ高く^{見せ消ち}買ふ直を付る^{十三ウ}□□□□□るものも有へし。左候而大概の直段相分候後も大掛ニせずして、捌方之道開候上盛大^ニ被成候か大丈夫と申事也。上野か云所も同じ。當人襟面を拝見いたし度と申候付、直段付をみせ候処、実^ニ恐愕いたし候^ニ付、是ハ旧の直段ゆへ御方當時賣る、処の直段先取極相成候而賣方有之度、是ニ拘り候而ハとても賣れず候故、誰も取入候直段ハ肥前の品等と比較なされて直段相立候様給度、左候ハ、笠野方^江御ミせ候而猶又御談合^ニ

(十四オ) なし給り候而、賣立ツ所か專一^ニ候故、明日は運上所より御引渡可相成候^ニ付、珍品取調之上當時賣立候直段御付給度旨相頼置候事。○八ツ時分より市中見物^ニ出る。往來の多き事^{十間}を見通すことなし。東京通町^井浅草邊の如し。町はつれより城涯の堀端を通行す。長崎^ニ而平田氏より聞し^ニたかわす、犬諸所^分出はゆること甚し。やうく町に入て退く。又日本人の衣服と蹈物に^{□□}を^{□□}甚し。店頭^ニ而買物をすると男^ニ(十四ウ) ^{□□□□□□□□}にかゝりなとして紗の羽織を見る。何こに行ても同断。見物^ニ集るもの十重廿重也。○十時比町田氏^ニ入來。此節^ハいづれ永續の規則相立候様有之度、右二付只今品川領事方^江細々談置候^ニ付、上野屋と熟談之上堅く約定書取かはし、後年^ニ至り混雜無之様至極尤の事也。物品引渡相成直段等凡相究候ハ、相方故障無之様熟談之上約定相究め、品川領事の検査を受、以來堅固^ニ致^{□□}續候様可致旨返答いたし置候事。此節^ニ(十五オ)の一条ハ物産を繁殖して国を富すの至情より起り懇切之周旋、実^ニ町田氏の赤心感服之至也。夜六時過帰る。それより豪谷士と懇話、八時を過して伏る。

○六月七日小雨旧五月三日、肌持至而よし。^{*}雨終日不止。在宿也、亭主の男子誕生日の由にてあん餅出る。豪谷士白ぬめの風呂敷に桃と靈草を染筆也。此仁ハ文人画ハ勿論漢字二長せし人なれハ、此節^{□□□□□□□□}開拓使北京始諸所色々探索の^ニ(十五ウ) ^{□□□□□□□□}従の筈相究る。此人ハ画を以當地^ニ遊び粗支那語も相分り、至而風雅の仁なり。実^ニ藝ハ身を助るとか、此節の行相済候上ハ、何か官員か其下仕に相違有之間敷、

尤人物至而平穩なり。土氣も相立居候仁故、一通の官員^ニハ相違有まし。四時比より南部弥八郎殿筆話せんとして明りのよき坐敷御入來、故に我か卒を出して其業を助く。竹田氏、水川氏其外段々客來有。亭主西清古鑑殘欠本見せられ候故寫方也。南部氏も被引取、豪谷士も^ニ(十六オ)三松号へ行れ候故、ひとり日本酒少々のミ七時過ふせる。

○六月八日雨天旧五月四日、昼飯後より城内見物^ニ出る。何小路、彼の小路といふ通行筋、其狭き事やうく一問位左右の軒落合通行筋雨ふり^ニハくらき程也。骨董店其外、反物店、肉屋等別而多し。其不潔なることいはんかたなし。御国の塩屋町等の及ふ所にあらず。実^ニ暑中^ナとハ腐はひ氣^ニ而胸中を變すへし。北の^{□□□□□□□□}の中程^ニ而、祐充^江土産の為顏真卿の^ニ(十六ウ) ^{□□□□□□□□}取入る、其内拙者を見物長幼男女十重廿重也。やうくぬけて出る。右取入方^ニ付言語は分らず。すへて筆談也。西門^江出て城の堀涯を通り花園^井牛馬飼所通行、其内城内城外唐画^ニ書たる如き家作諸所^ニ有。それより寄留地を見物す。爰ハ城内と唐人の住家反對し清潔なること實^ニ感心也。絶間なく塵取馬車を仕掛、塵ハ勿論、雨ふりハ泥左右もたまる故、是をすへて火すくひの如き物にてとり、馬者^ニハ平き大きな箱^ニ(十七オ)を仕掛、其内^江入る、段々見物してくれ前帰る。内ハ亭主の嫡子の物舞^ニ而大悦ひ也、拙者も被呼出張る。佳肴珍味山の如し。日本の客人式拾人許有、其内十八九の女子四人、是ハ諸所^江来居候由。尤亭主^江祝ふ、女迄込れハ三拾人近き集^ニてにきくし。一首亭主^江祝ふ、「榮行ちよのためしに引そめしあやめは君かみとり子の為、

夜十時過部屋^江歸る。昼町田氏^江書付来りたりとて出す。町田氏居□□□□来れとの事也。其返答ハ弥七郎より相済^江「十七ウ」□□□□□□□□其夜腹大きく故豪谷士と列立夜店見^江出る。履、毛拂取入歸る。拾一時頃伏る。

○六月九日晴上る、旧五月六日、昨夜取入物之價^江壹弗、豪谷士^江相頼。不足今壹弗出して首尾す。今一合不足故半弗差出候処、壹合ハ又買物ニ出候時差引いたすへしとの事故、壹合不持合故延置也。○昼時分反物屋来る。葛布壹疋、ハエナンカ壹疋、五元六角相拂。町田氏^江入来。後刻ハ来れとの事、尤弥七郎同道、是も陶器の事ニ付色々談しの為也。実に深切^江「十八オ」を尽さる、といふへし。やかて運上所^江荷物相届候故改方、弥七郎^江手代兩人、支那人式人、拙者、六人ニ而取調方也。七ツ過ニ成相済。荷作の甲乙ニより数多疵物ニなる。一箱は全みちんニなる。^{*}込少く花生と花生と相逢たるとミゆ。皆々其様ニ荷作あしくはケ様なるも當前也。以来ハケ様^江と肥前の荷作差出させ候而此通作れとの事也。幸ニハ大花生無難ニ而大幸也。此荷作至而籠抹、はたか物を入□□□□と□弥七郎其外も申候而実^江面目を「十八ウ」□□□□茶碗皿類ハ念か入たる故さほと疵ハなし。跡ハ手代共^江相頼、弥七郎同道ニて町田氏^江差越。尤花園の下より船也。差越候処第一陶器取扱首尾合等之談し也。其内酒も出る。肴^江ニ牛皿○乳皿○ぶた皿○魚皿○天ふら皿○玉子焼皿○挽盛○吸物○飯出る。実^江西洋料理の手重き郷饗也、是もひとへに愛國の赤心より出ること也。其実ハ産物を延蔓して國を富さんとの誠分出ると被察、且品川領事へも別而被談置たる由ニ而、弥七郎品

川氏^江出候へハ、「(十九オ)遙々御持渡り殊^江御国益^江近々相成品柄ニ候ゆへ誠実^江取扱いたし盛大輸出相成候様尽力可致旨被申聞候由弥七郎^江断也。早くれ過ニ相成候故、十四五町の川中故、いとまこひいたし歸る。渡は迄送らる。六日の弓月西方ニかたむき、渡船の内をてらしさかのほる氣色実^江感心す。歸りて九ツ過伏る。

○六月十日曇旧五月七日、早天より起上り店へ出て□□□□□□□□□□また起出す候故、ひとりにてゆる^江取^江「十九ウ」□□□□□□□□□□ニ而相済。すへて櫛面ニとる。其央に英の女来て袋形の水瓶を二ツ買て歸る。亭主、手代兩人ニて飾方相済。やかて町田氏^江入来。同道ニ而領事品川^江出張候処、ゆる^江陶器製造方^江作法立を被聞、且當人も考へをいろ^江被相断。其口氣至而深切也。^{*}火度一条之事などそふる。西洋之次第も探索いたし度との断也。子息衆^江ゼルマン^江へ生徒^江行候て居候由、とふか此方へも申遣しそうな口氣也。暫く相断歸る。「(二十オ)土産ニ水瓶と皿を壹枚遣す。地土^江繪模様様の次第実^江感心之由厚く禮をいはる。自分兩日中ニハ拝見ニ来るとの断也。如案其晚付拙者留主人来。熟見有之、上野屋へも色々断有之たる由。尤拙者^江も傳言有り。それ^江笠野来る筈故、町田氏も入来被相待、その内拙者ニハ櫛面取調方也。笠野不来、町田氏^江歸らる。それより櫛面書方九ツ時分迄ニ相済。又有馬氏^江遣す□□□□□□□□弥七郎来て色々趣法建の断也。」(二十ウ)□□□□□□□□□□六月十一日雨天旧五月八日、夜明ると宿元^江狀書方也。尤今□日本へ歸る便舟有る故也。且且會社^江長崎詰平田氏、上野弥平治、木村惣平^江一封ツ、にして上封ハ上野弥平治宛也。其

内ハ丸や宛、其内ハ平田氏、有馬氏、其内^江宿元状[＊]ふしこミ丸や^江頼遣す。平田氏等へハ當港の形勢旁の報知なり。○昼過^江又見物^江城内^江行。大雨に逢てひたぬれになり帰る。○田代や

の養子源之助町田氏よりの「(二十一オ)手紙を持参す。内^江先日差送候水瓶、口の付根より水洩候由心得の為申遣すとの事也。帰り候故色々圖寫方也。○今日弥七郎手代等と直段の致吟味、凡相極る。四掛位及との事也。先此処^江而賣立申候ハ、少々ハ高下も可有之、いつれ買手^江二寄りて直段も違候由、一樣^江ハ參兼候由。黄金家も無暗の物数寄、男女^江おひては直段此方云通^江買入候者も有之由。又黒人^江付下ケ候由。いつも当然なり。」(二十一ウ)□□□□□□色也。○佐藤氏帰朝せらる。直^江東京^江被行候由^江二付、川村氏^江傳言す。夜入過出立也。門迄送る。少々^江のミて伏る。

○六月十二日晴旧五月九日、朝飯前豪谷士と同道^江而唐置買^江二行。式円也。鎗錠も取入る、直^江二帰る。五時過^江米利^江ダンの大橋を渡りて田畦の処迄見物す。植方ハ凡五六寸間位に植て有り。段々川上の方へのほり、初発の橋^江四番目の橋を渡り帰る。又夜入過^江諸遊歩してやかて帰る。今日「(二十二ウ)弥七郎^江肥前有田山の直段書を寫して貰ふ。其内陶器繪圖取方也。夜中より雨ふる。

○六月十三日雨旧五月十日、五時比よりギヤワンの皿類買^江二出る。大皿^江沓ツ、中皿^江沓ツ、水呑式^江沓入帰る。豪谷士繪書有。段々客来有り。十時過少々^江のミて伏る。

○六月十四日雨旧五月十一日

「(二十二ウ)

□□□□□時の御切手ハ丸屋喜右衛門方^江世話^江而丸屋手代と同道^江而先町會所^江出張、印判を貰ひ、其後出張外務省^江出御切手をいた、く。官員^江直渡、口達別而御示諭也。右御切手極々大切^江二して帰朝の節直様相納候様也。上海^江着之節上野屋分領事^江差出す。帰朝之届申出候へハ右御切手^江裏して下る。是を丸屋^江相頼返納致候事、六月廿一日也。

「(二十三オ)

○初て渡る時何も不案内故たとへハ丸屋^江船の通弁^江上海^江而の都合被相頼、尤其者^江船^江而逢ひ肴料式百疋位遣し候へハ着之節上野や田代や式軒之内いつれか船へ乗込来候故、此者^江右通弁之者^江此御客御頼申段申入候得者直様荷かつき人足列て来居候故、乗込居候手代^江荷物イク【見せ消ち】何つと相頼、同道^江而下り宿屋^江着く。其後ハ日本も同じ。帰る時算面をす□□□□□(二十三ウ)

【頭書】□□も出る)

□□□□□何も不入、平履^江沓足下無用、手水道具もうかひ道具も。尤水も二通有り。飯ハ西洋料理也。給ひ方^江二不取なれならハ部屋^江取寄候がよし。此節も食方^江二こまり候故、取寄食す。是ハ一番安氣にてよし。酒でも菓子でも給仕^江いへハ何も不自由なし。小便道具迄大便弁して窓^江海^江すつる。

○下等ならハパン式朱かの位【割注】但菓子パン半/常のパン半)如斯^江二而もよし。○煮出し汁フラスコさし○平履^江沓足(二十四オ)履ならてハ草履^江二而ハ毎日看板を洗候故ぬる、故

也。○大ノ急火焼壺ツ、満水入用なり。○水呑壺ツ○梅干少々○ラクキヨ少々○焼酎泡盛之間壺盃位○少き手洗鉢壺ツ○菓子少々○菓物少々○包煙草ニ而も巻たはこにても少々用意すへし。小仕へいろく世話ニ相成故是ニくれ用也。○深き猪口壺ツ○旅中箸式膳位○切小刀壺本○挟み壺本○矢立壺丁○たはこのむ人ハ早付木を用□□□□□□れハよし。○右入用の竹籠孔の「(二十四ウ) □□□□か弁理ニよし。○洋氈の式枚續ならハ猶よし。上等ならハけつとふもいらす。



【頭注】(総)

如斯も有。

(総)

如此も有。

是ハ上に

□□ミを張

□□□のも

□□取

□□のならん。

□□

□□

□□申内

□□なけ

□□

□□

□□口

なし。

○古の上綿百斤ニ付當時【割書】五月也／夏分也) 拾式枚五拾錢位之由。

「(二十五ウ・二十六オ)

「(二十五オ)

○新の上綿百斤ニ付拾壺円五拾錢分八拾錢、貳拾円位迄と云ル。右壺包六拾斤入、八拾斤入、百斤入、百貳拾斤入、百五拾斤入、百八拾斤入有といふ。但北口分出るを上等とし南口分出るを中等とすと云。右を鹿兒島屈方、上海分長崎迄壺円貳拾五錢位、長崎分鹿兒島迄壺円ニ而いか、と云。

「(二十五ウ)

□□□□□□生の内何か入て送度候得とも何も当地近向品なしといへハ椎茸かよしといふ。

○椎茸百斤ニ付縣元ニ而四拾円分四十式三元迄二買てよしと、上海ニ而ハ五拾五六円分六拾圓位ニ賣る、といふ。

長崎分上海迄税金并運賃小橋迄凡五六円ニ而済と云。

梅雨の前後ハ當所の直段三拾六七円分四拾圓迄と云。」「(二十六オ)

○今井焼の陶器山ハ從然ハ凡壺ヶ年之出来高平均ニして壺万貳三千円位之由。西洋輸出相成候當時ハ凡四万圓餘之賣出しニ相成候由。○上野屋、崎陽号ニ而壺ヶ年の賣出し年之平均して凡五千円位之由。

右六月十二日雨中上野弥七郎分聞。

「(二十六ウ)

□□□□の品々^并神戸横濱等之其品

一 凡賣仕【見せ消ち】捌 舞相成迄之間究渡且金子引結約定いたし置度事、

但一物品凡何百円丈ツ、差送候哉之事

一 税金運賃錢其外諸入費之事

一 諸品長崎ニ而御究相成候哉之事

一 右之金子引換之事

一 右賣仕舞相成候ハ、以來連續之目途相極約定いたし度事
└ (二十七オ)

但右一ヶ条ハ此節之事ニ非す。
只今之心得

一 高利を得んとすれハ從然の通強富家の黒人^并無知の物数寄者^并を待て賣るの外なし。然れハ名器珍品の商法ニして出産物の商法に非ず。終に廢山に及ふへし。

一 只今相究候直段之通安價にして輸出を□□□□せんとすれハ金足諸費を」(二十七ウ) □□□□なし。且又廢山ニ及ふべし。右次第二御座候故、御國産を繁殖して盛大の輸出を量るの目的立兼申候。依而此節持渡りの諸品上野の、意に任せ賣捌方為致候ハ、凡の直段且形勢も現事相分り可申、然る後右賣捌直段ニ而會計相立申候ハ、追々致製造、上野屋へ一手ニ託し候歟、又ハ田代屋^江も託し候歟、幸阿山之御座候故」(二十八オ) 一山ツ、託し候ハ、いか、とも相考申候。且又笠野等之開通号へ加入し、右へも託し候ハ、いか、と問今之処にてハ決定いたし兼申候間、一先帰國之上、令始評議を交決定の上永續の規則相立約定書取替いたし候方可結哉、何分

御賢慮奉伺候。

但、是迄屯居候物品凡百四五拾箱ニ而金高□□□三千円餘も御座候付、三部一二しても」(二十八ウ) 三四千円ニは及可申候間、東京、神戸等又ハ苗代川へも殘品御座候故、追々取寄上野方へ託し賣捌方為致候上、旁取究度相考之事。

六月十三日

右之通町田実一君^江差圖を受ける含ニ而引合候事、其當日上野屋分此節之品のミの規則書差出す。町田氏と及談合書直させ候而笠野へミせ候処、此節之のは」(二十九オ) 是ニ而尤也と申候故、品川領事^江入一覽候処、此節ハ聞置二いたすへく本約定ニ相成候節ハ印鑑いたし、尤三通認め、尙通ハ領事方、尙通ハ會社方、尙通ハ上野屋へかくこいたし置候得は一方紛失いたしても両方の證據有之候故、混雜の起りたる時ハ右兩證書を以取捌可相成旨品川氏被申候事。

└ (二十九ウ)

└ (三十オ・三十ウ)

□□□□たるヶ条

○地位のよき事。

○川幅の廣き事○平地の莫大ニ廣き事。

○氣舟^并支那舟の多き事。○往來人の多き事【割注】浅草寺内ノの如し。○家作の屋根廻り^并軒端の割物の事。

○支那人居住の小路溝橋の不潔なる事。○死人の館の作やうの事。○死人をかこひ方の事。○一輪車の事。○馬車、人力

車〔傍書〕日本車といふ也の多き事。殊ニ馬車多し。○女の足の先の少く短き事。○中腰乗物の事。○異人、日本人寄留地の清潔なる事。○氣船〔三十一オ〕等之船付場之事。○城郭の堀廻りの作りやうの事。

○馬車、人力車等夜二三時比不絶通行する事。

○支那舟の櫓之事。○支那船の不潔之事。○柳の多き事。○川水の濁りたる事。○肉やの多き事。○茶屋の人込の事。○城内等小路石を疊たる事。

○支那人の手足を覆ふ事。店內二而バツチのミにて腰より上ハはたかの事。○下僕たりとも一統履をふむ^履む事。○日本人の衣服^半はき物に氣を付る事。□□□□事○運上所の家作の念の入たる事。〔三十一ウ〕

□□家作の廣大ニして手を尽したる事。

○支那人の家毎に關帝を祭る事。○凡店毎ニ香爐を焚事。○城隍廟の後園の池中の家作始廻りすへて玆敷作り也。橋も両方へ掛る。手摺ハ木にして柱と橋は石也。段々寄石も有り。遊歩の所とみえて見物おひたし。茶屋などハ數十の樓閣ニすき聞なし。廻りの家々ニハ画人、書人書画を書いて賣買する形勢也。○死人を長き厚に棺^棺に入れてその俣田畑の脇にいか様自分〔三十二オ〕地ニも候哉、次から次に弁へ瓦家の如き地石前後を連瓦ニ而疊ミ上ケ□□たるも有り。力の及はざるものハその俣上にわらなとにて家ねの如きものを作りたるも有。終ニハ土を掛けて岡の如くなすとみえて、その館の有所の続きはすへ土を盛立て岡の如し。花を手向なとする事とハみえず。捨きりとみゆ。葬之事ハ不聞、送りの心ハよほと盛んの

由也。○同地之廣き事、実ニ驚く次第也。大凡田入間々に家作を作るとミゆ。すへて瓦家也。田之植様□□□□五六寸目にさして有。地はよほと〔三十二ウ〕□□□□大河の流故涯の洗出しにてすかれたる土とミゆ。五月五日比ニハすへて植仕舞て有り。はや青み付居たり。○橋の作様真中の車の通る所ハ壹段ひきく、人の往来する所ハ左右に高し。又少き橋ハ三部一人の通路、三部式車通り作りて有。よき仕やうなり。○玉類の多き事、骨董店ニハ大かた有。又玉斗のミせも有。玉石ニ而作たる印石一偏の店も有。女のうてにぬく輪玉、就中多し。少し餘勢の有ものハ皆玉の腕輪也。凡薄青色ニ青のくものやうな〔三十三オ〕もやうの入た□□なり。支那地ハ奥山ニなるほと玉類沢山^{澤山}出るとミゆ。○紫檀、黒檀ニ而盆類其外何品ニ而も飾になるもの、屋を皆大方木ニ而作る。いくより出るや糺へし。

○唐人も西洋人も家作ハ格好違へと皆運瓦を用。瓦は少き瓦をいやか上に重ねてふく。少く薄きハ大風にハいか、とおもはる。西洋人の家作の美を尽たる事、大かた東京の越後や又^又ハ海職橋の三ツ井等の如し。異人も永住するの形勢とミゆ。段々ニ聞けハ支那方偏湊の□□□□ホンコンも小き小島ニ而桜島の如きよしなれ〔三十三ウ〕□□□□家を建居候由。上海の如く手廣ニハなきよし。昨日来るといふ鹿児島^{鹿児島}の仁相良^良といふ人より聞。久敷カントンに居たりとの事、又近日中行といはる。言葉なとよほと通し候由也。〔三十四オ〕

〔注〕

【五月二十五日】

旧知事公…島津忠義。

両陶器山…田之浦と苗代川にあつた陶器製作会社。

江口…東シナ海に面した港町（現鹿児島県日置市東市来町）。

藤兵衛…船宿の亭主か。

串木野端島…現在のいちき串木野市羽島。慶応元年の薩摩藩

英国留学生の出発地として知られる。

【五月二十六日】

笠野氏…笠野熊吉。薩摩出身の実業家。↓解説

令君…大山綱良鹿児島県令。

御切手…旅券。現在のパスポート。

町田君…町田實一のことであろう。↓解説

上野屋…↓解説

丸屋喜右衛門…後の資料だが佐々澄治編『長崎県商工人名

録』（明治二十七年八月）によれば、丸屋は日本郵船・大坂

郵船等を取り扱う回船業者で旅館業を兼ねる。所在地は

「長崎市江戸町五十番戸」。

町田助十郎殿…町田實一の父。

有馬彦十郎殿…啓四郎の次女常の夫。

【五月二十七日】

万歳町…長崎市の中島川右岸に位置する。長崎市万才町。

髪摘み…散髪をいう鹿児島方言。

伊官…不明

平田氏…旧薩摩藩士と推定されるが詳細不明。

義董…柴田義董（一七八〇～一八一九）。江戸後期の四条派の

画家。呉春の弟子。

【五月二十八日】

木村屋…木村屋惣平。

白茶家…白薩摩の土瓶。

【五月二十九日】

角唐々…角型のからからの意。からからは南九州から沖縄に

かけて使用される、注入口と注出口を別にする銚子の類。

わらつと…薬苞。割れないように薬で包んだ品物。

横山氏、忝元氏…不明

枕山氏…樺山一郎か。

川口氏…不明

有馬氏…前出の有馬彦十郎か。

御嫡家様…木脇家本家。当主は木脇祐治。啓四郎の義理の弟。

【五月三十日】

南京焼…「磁器を意味する江戸時代の語」（『角川日本陶磁大

辞典』『「南京焼」の項）。

服部氏…不明。

東北西惣…東奔西走。

古金屋…古道具屋。

指宿氏…指宿貞父。↓解説

亭寧…丁寧。

金銀家…金持ちの意か。六月十一日には「黄金家」という表

現が見える。

面働…読み方未詳。驚かせて自己を印象づけること、あるいはそのような物をいうか。

平佐…薩摩藩平佐郷（現在の薩摩川内市平佐町）。北郷氏の私領で、いわゆる平佐焼で知られる。

今井…伊万里。Imariの「I」が脱落した形に「今井」の文字を充てたもの。

金泥…金粉を膠で溶いた顔料。

鹿兒島平野屋…不明。

蚊牒…蚊帳。かや。

【五月三十一日】

開通号…遠山景直『上海』（一九〇七年）には「明治六年八月

開店、同八年十二月閉店。營業は北海道物産販賣なり。開

拓使御用商（御用商とは用達商人のことなり）榎本六兵衛、

林徳左衛門其他五六名の組合にして、北海道海産物を同使

より委託販賣せしものなり」とある。笠野熊吉が開通号に

関与する人物であることは、『上海日記』二十八丁裏に見え

ている。

田代屋…↓解説

地半…襦袢（じゅばん）。和服の下着。

氣ほうし…「氣ほかし」の音便形。気晴らし。

【六月二日】

かくこ…格護。大切にしまっておくこと。

取入…入手。購入。

【六月三日】

仕舞…準備。

ボンス…柑橘類のダイダイの搾り汁。

和歌一首…↓解説

崎陽号…↓解説

舌代…「短い挨拶文。口上書き」の意だが、ここはチップの

意で使用するか。『上海日記』23丁裏には「肴料」という言

葉を用いる。

【六月四日】

乗輿…乗組。

ねり…うねり。

前之濱…鹿兒島城の前の浜の意。鹿兒島湾に面す。

【六月五日】

看板…甲板。

直左右…じきそ。「直接会ったり見たりした人から聞く消息。

（鹿兒島県肝属郡）」（『日本方言大辞典』）

地走…馳走。

小田縣倉子城…小田県は明治四年に置かれた現在の岡山県西

部、広島県東部にまたがる県。倉子城は倉敷のこと。

衣笠豪谷…↓解説

運上所…開港場で貿易の取締まり、関税の徴収などを行った

役所。

【六月六日】

十間…一間は約一・八メートル。

混雑…ごたごたともめること。もめごと。取りこみ。

【六月七日】

肌持…「肌の感触」あるいは「気候。季節」という方言。南

九州から沖繩にかけて用いる。

白ぬめ：白統。白くつやのある絹。書画に用いる。

南部弥八郎：↓解説

竹田氏、水川氏：不明。

西清古鑑：清時代の宮廷の古銅器や古銭など絵入りで考証した書物。全四十巻、附録十六巻。

三松号：上海の日本人経営の旅館か。

【六月八日】

御国の塩屋町：「御国」は鹿児島のこと。城下を流れる甲突

川の左岸河口付近の町。

祐充：啓四郎の次男藤次郎の諱。

顔真卿：中国初唐の書家、政治家（七〇九～七八五）。

寄留地：外国人租界。

物舞：物前。「物前」は正月、節句など特別な日の前日をいう。ここは端午の節句の前日。

【六月九日】

ハエナンカ：不明。

込：荷物を固定するもの。緩衝材。

郷饗：「饗應（応）」の書き誤りか。

【六月十日】

火度：陶磁器を焼成する温度のことか。

ゼルマン：ゲルマン。独逸（ドイツ）。

【六月十一日】

ふしこみ：封じ込み。

黄金家：富豪のことか。

無暗：むやみ。

佐藤氏：佐藤鎮雄か。衣笠豪谷『乗植日記』に「此夜佐藤鎮

雄回日本（邦）」とある。

【六月十二日】

米利：ダンの大橋：不明。

有田山：肥前有田の窯。

【六月十三日】

ギヤワン：ギヤマン。ガラス製品。

急火焼：きびしょう。急須のこと。

ラクキヨ：辣韭。ラッキョウ。

少き：小さき。啓四郎は「少し」＝「小さし」で用いることが多い。

早付木：マツチ。

従然：従前か。

割物：陶器。

關帝：関羽。中国秦末から三国時代の武将。

城隍廟：中国の土地の守護神（城隍神）を祀った廟。

館：漢族の墳墓として上田信は三つの類型を立てている。

「一つは、平坦な所に土を盛り上げた、いわゆる土まんじゅう型」、第二は、山腹の傾斜面に造られたもので、斜面を

円形にけずったもの、「第三は、馬蹄形に石牆を積み上げ、その中に墳墓を造るもの」（『問俗録、福建・台湾の民族と

社会」(平凡社、一九八八年)の注。

連瓦：煉瓦。レンガ。

越後や：東京駿河町にあった三井組。三階建ての洋館があり、浮世絵にも描かれた。

海職橋の三ツ井：東京兜町海運橋のもとにあった為替座三井組の東京三井組ハウス。五階建ての擬洋風建築で明治五年竣工。浮世絵にも描かれた(明治五年伊勢屋兼吉刊、歌川国輝「東京三井ハウス」など)。

相良 といふ人：不明。ここにも薩摩の人物が海外で活動している一端が見える。



本稿は、JSPS科研費(基盤研究(B)「能動的市民性の形成を目指す歴史資料保存研究の新展開」(22H00689)に基づく成果の一部である。

謝辞

貴重な資料の翻刻および図版使用をご許可いただきました
鹿児島大学附属図書館に感謝の意を表します。また、翻刻及び
解題作成に際してご助言を賜りました内山弘氏、橋口亘
氏、兼城糸絵氏、渡辺芳郎氏に感謝申し上げます。

(本学教授)